

## Ⅱ 日・韓比較

山口県立大学国際文化学部助教授 金 恵 媛

### 1 基本属性

本調査の結果をみる前に、日本の国勢調査に該当する「2005人口住宅総調査」(統計庁)を通して韓国の高齢化状況を概観しておこう。2005年11月1日現在、韓国人人口総数は4704万人である。年齢階層別構成比をみると、15歳未満19.1%、15-64歳71.6%、65歳以上9.3%(都市地域7.2%、農村地域18.6%)となっている。60歳以上人口は、韓国人人口総数の13.3%に当たる625万人で、うち女性は57.9%の363万人である。

今回の調査は、韓国全体の高齢化状況と比較すると、60歳代の割合と、70歳以上の年齢層における性比(女性100人に対する男性の数)がやや高めとなっている(表12-3)。

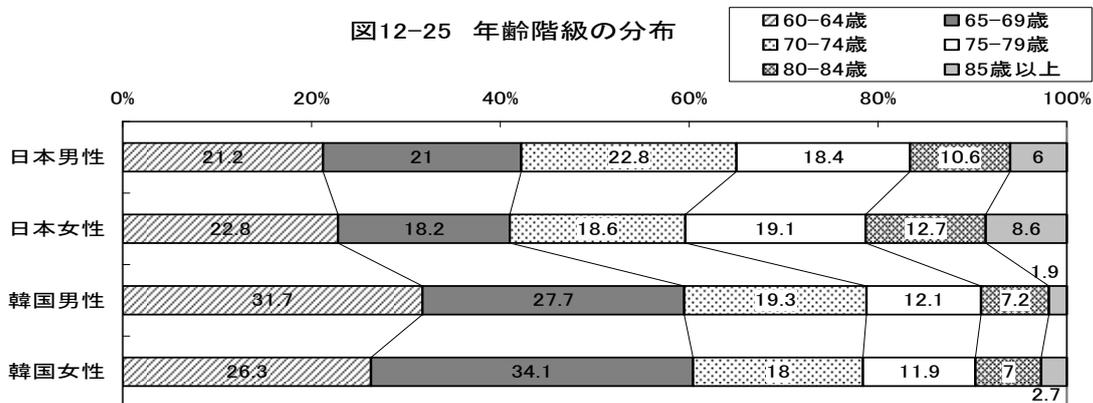
表12-3 60歳以上人口の年齢階層別構成比及び性比 (%)

	人口住宅総調査		今回の調査	
	年齢階層別構成比	性比	年齢階層別構成比	性比
60-64歳	30.1	90.5	28.6	87.7
65-69歳	27.1	81.8	31.4	59.2
70-74歳	20.3	69.6	18.6	78.3
75-79歳	12	54.5	12	74.3
80-84歳	6.8	46.3	7.1	75.6
85歳以上	3.8	33.7	2.4	50

資料:「2005人口住宅総調査」(韓国統計庁)

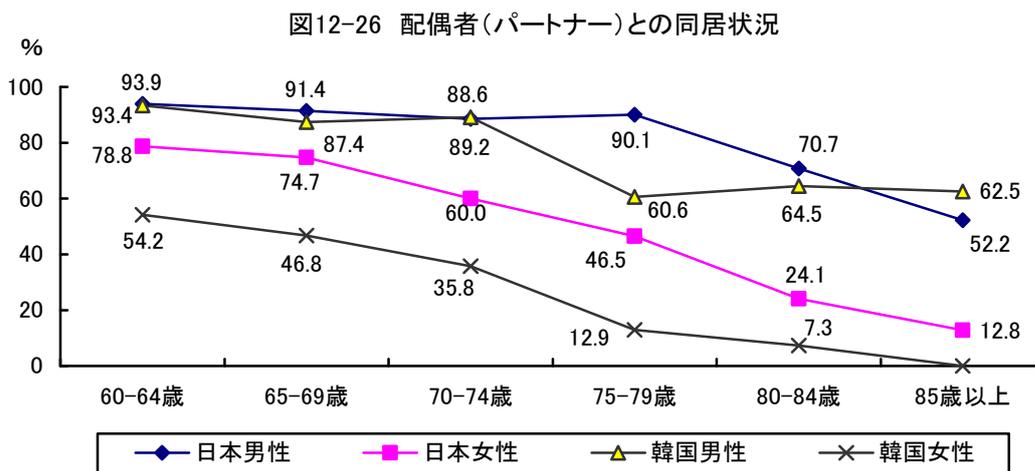
#### (1) 性・年齢別構成 (F1,F2)

日韓の年齢階層別構成比についてみると、韓国は、日本に比べ75歳以上の後期高齢者の比率(日本38.0%、韓国21.5%)が低く、60歳代層が全体の60%を占める。性別では、両国とも女性の割合(日本54.2%、韓国57.9%)がやや高い構成となっている。



(2) 結婚状況について (F3)

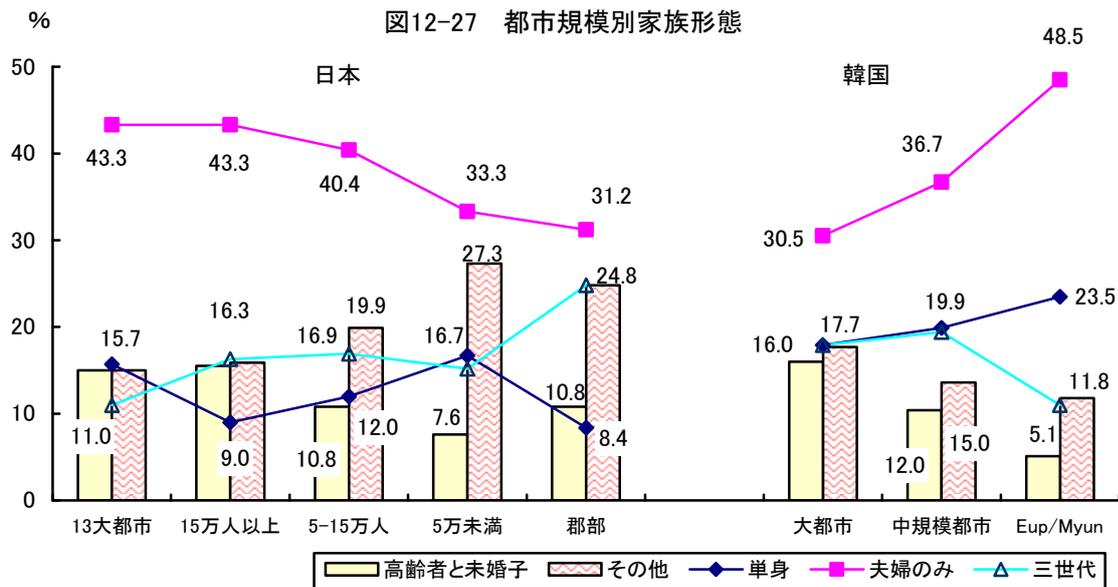
結婚状況についてみると、両国とも時系列的に大きな変化はみられない。未婚や離婚・別居の比率が極めて低く、「現在、配偶者あるいはパートナーと同居している」と「配偶者あるいはパートナーは、死亡している」で大別されるというパターンは両国で共通している。配偶者との同居率をみると、全体としては日本が韓国より約15%高いが、男性では日韓の差がほとんどみられない。女性の方は、70歳代まで約50%を維持している日本に対し、韓国は65歳に既に50%台を割っている。



(3) 家族との同居の状況及び子ども数 (F4,F5)

家族との同居状況を時系列でみると、特に変化が大きい形態は三世帯世帯である。第3回調査をみると、三世帯世帯の割合は日本29.1%、韓国35.5%と両国の差が大きく、韓国では三世帯世帯の割合が最も高い。しかし今回の調査では、両国がほぼ同水準(日本18.1%、韓国17.7%)で並び、対照的に単身世帯と夫婦世帯の増加が観察される。夫婦世帯の場合、第3回調査の日本31.0%、韓国29.3%から今回の日本38.4%、韓国35.8%へと、両国ともに7%前後と大幅に増加している。単身世帯についてみると、同期間において、日本は8.0%から11.0%へ、韓国は13.7%から19.5%へと変化している。韓国の単身世帯の増加が著しく、三世帯世帯を上回っている。また「家族・親族以外の人」との同居の割合が5%前後と一定の割合を示す日本に対し、韓国は1%前後と低い。

世代形態を地域規模とクロスしてみると、日本の郡部では、三世帯世帯の割合が高くなっている。韓国の「Eup/Myun」地域において70%以上が高齢者のみの世帯となっている状況とは対照的である。



「現在の子ども数」及び教育年数では、韓国の時系列的変化がよく現れている。まず教育年数についてみると、日本は「9年」(24.9%)と「12年」(22.6%)の順で多い。韓国の場合、年齢階層別、性別による教育年数の差は依然として顕著であるが、「6年」(31.0%)が「学校教育を受けていない」(24.5%)を初めて上回った。子ども数をみると、韓国は、「5人以上」が最大値であった前回までと異なり、今回は「3人」(26.1%)、「5人以上」(26.0%)、「4人」(24.0%)とほぼ同率で並ぶ。日本の場合、「2人」(43.8%)、「3人」(25.7%)の順に多い。

## 2 家庭生活

### (1) 夫婦の時間 (Q2)

夫婦の時間の過ごし方(Q2)についてみると、日本の場合、「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」(日本 59.1%, 韓国 34.3%)の割合が継続的に高い。一方韓国は、今回初めて「どちらの時間も持つようにしている」(日本 18.9%, 韓国 44.6%)の割合が最大値となっている。「夫婦それぞれが自分のための時間を持つようにしている」の割合は日韓ともに19%台で、時系列的な変化はあまりみられない。

### (2) 家族や親族のなかでの役割 (Q3)

家族や親族のなかでの役割(Q3)についてみると、複数回答の合計比率は韓国の方が圧倒的に高い(日本 129.3%, 韓国 207.6%)。なかでも「長」(日本 23.4%, 韓国 59.2%)、「家計の支え手」(日本 22.2%, 韓国 33.5%)、「相談相手」(日本 24.9%, 韓国 37.7%)など、いわゆる「家長」としての役割認識においての差が大きい。時系列でみると、日本では大きな変化がみられないが、韓国では前回に比べ前述の「家長」としての役割認識が大幅に増加するとともに「役割なし」が半減している。

### (3) 別居している子どもとの接触頻度とつきあい方 (Q4)

別居子と会ったり、連絡をとる頻度 (Q4) についてみると、日本では「月に1~2回」(34.9%)と「週に1回以上」(30.1%)がほぼ同水準で並び、「ほとんど毎日」(16.7%)の割合は相対的に低い。韓国の場合、「週に1回以上」(43.7%)の割合が最も高いが、「ほとんど毎日」(23.2%)の割合も日本に比べ高い。時系列でみると、日本の場合ほとんど変化がないが、韓国の方は、「ほとんど毎日」と「週に1回以上」の割合が継続的に増加している。

老後における子供や孫とのつきあい方 (Q5) についてみると、日韓ともに「ときどき会って食事や会話をするのがよい」(日本 42.9%, 韓国 54.5%)が最も多く、次いで「いつも一緒に生活できるのがよい」(日本 34.8%, 韓国 29.8%), 「たまに会話をする程度でよい」(日本 14.7%, 韓国 13.0%)の順である。韓国は、同居志向は日本より低いが「いつも一緒」と「ときどき」の合計値は日本よりむしろ高く(日本 77.7%, 韓国 84.3%), 近居志向が強いと考えられる。

### (4) 心の支え (Q6)

「心の支え」(Q6)となる存在についてみると、「その他の家族・親族」や「親しい友人・知人」などへの広がりほとんどみられず、狭義の家族に限定する傾向は日韓に共通している。韓国の場合、「配偶者あるいはパートナー」(日本 64.0%, 韓国 52.7%)より「子供」(日本 53.2%, 韓国 62.6%)への期待が高くなっているが、配偶者との死別率が60歳代で既に50%台に至っていることが影響していると考えられる。「孫」に対する認識をめぐっては日韓の差が大きい(日本 18.4%, 韓国 7.3%)。孫との同居状況とクロスしてみると、同居(日本:42.4%, 韓国:13.7%)の方が別居(日本 12.9%, 韓国 5.6%)に比べ孫への期待度が高いものの、日韓の差はさらに広がる。このような傾向は前回の調査でもみられたものであり、同・別居を問わず、韓国の高齢者は、孫を「心の支え」とする認識は薄いようである。

## 3 健康・福祉について

### (1) 健康状況と日常生活 (Q7)

現在の健康状態 (Q7) についてみると、「健康である」(日本 64.4%, 韓国 43.2%)及び「病気がちで、寝込むことがある」(日本 5.2%, 韓国 21.0%)において日韓の差が大きい。時系列では、日韓ともに「健康である」の割合が継続的に増加しており、日常生活における介護や介助ニーズ (Q8) においても、「まったく不自由なく過ごせる」(日本 85.0%, 韓国 73.9%)の割合が継続的に増加している。

健康の留意点 (Q9) についてみると、韓国の場合、「健康に心がけていること」の累計値が前回の247.9%から388.0%に大幅に増加し、「特に心がけていることはない」の割合も19.8%から5.7%に減少している。日本の場合、前回439.4%, 今回448.3%と、ほとんど変化がなく、韓国とは対照的である。留意している内容に注目すると、韓国の高齢者は、休養や睡眠、規則正しい生活、散歩や運動、なるべく外出するなどの項目で高率を示す。「栄養バランスのとれた食事をする」(日本 59.1%, 韓国 31.1%), 「健康診査などを定期的に受ける」(日本 45.0%, 韓国 26.5%), 「地域の活動に参加する」(日本 20.3%, 韓国 7.5%), 「趣味を持つ」(日本 41.3%, 韓国 19.8%)などにおいては日本との差が大きい。このような傾向は日頃の食事における留意点 (Q10) でも同様に観察さ

れる。「1日3回、規則正しく食べる」(日本 85.3%, 韓国 89.2%), 「食べ過ぎない」(日本 49.0%, 韓国 47.4%), 「間食や夜食をとらない」(日本 27.0%, 韓国 24.1%)などはほぼ同水準であるが、「栄養のバランス」(日本 50.8%, 韓国 21.9%)や「食品の安全性」(日本 25.5%, 韓国 16.7%)への配慮は日本の方が高い。

#### (2) 医療・福祉サービス (Q13)

主に利用している医療サービスにおける不満や問題点(Q13)についてみると、時系列的には減少傾向にあるものの、日韓の差は大きくなっている。不満や問題点の累計値をみると韓国(93.3%)は日本(58.5%)のほぼ2倍である。不満や問題点だと思う内容をみると、「費用が高い」(日本 15.3%, 韓国 26.8%), 「施設が近くにない」(日本 6.1%, 韓国 12.6%)で差が大きい。

介護が必要になった場合の介護予定者、あるいは現在の介護者(Q16)についてみると、韓国では介護者として家族の割合が非常に高い(日本 72.4%, 韓国 86.4%)。「介護を職業とする人」の割合は、日本の13.8%に対し韓国は1.8%と低い。両国の「息子」、「子どもの配偶者」、「娘」の割合をそれぞれみると、韓国は22.2%, 10.9%, 7.9%, そして日本は7.2%, 6.9%, 14.8%である。韓国においては、家族のなかでも息子夫婦を主な担い手とする認識がまだ根強いように思われる。

## 4 就労生活について

### (1) 就労経験と就労形態

収入を伴う仕事の経験の有無(Q23)についてみると、「ある」人の割合は日本が90.1%, 韓国が86.4%と日本が若干高い。時系列でみると、第3回目(日本 87.6%, 韓国 83.9%)に比べ全般的に経験率が上昇している。就労経験を持つ人が一番長くした仕事(Q24)についてみると、韓国は「自営農林漁業」(41.5%)が最も高い。「自営商工サービス業」(21.3%)と合わせると「自営業者」の割合は62.8%を占めており、日本の27.8%の2倍以上である。「常雇(フルタイム)の勤め人」の割合は、韓国が22.1%であるのに対し、日本は49.8%となっている。

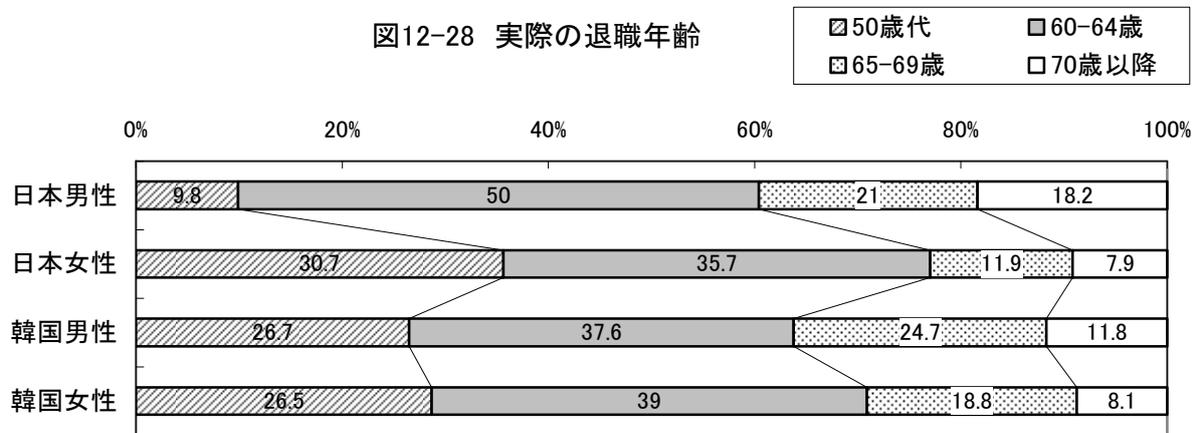
### (2) 現在の就労の有無と就労意欲(Q25,26,27,29,30,31)

現在の就労状況(Q25)についてみると、就労者の割合は韓国が5カ国の中で最も高い(日本 35.0%, 韓国 46.9%)。就労内容をみると、韓国は「自営農林漁業」(日本 18.8%, 韓国 39.5%)に偏っている。「会社又は団体の役員」(日本 9.4%, 韓国 1.0%)や「常雇(フルタイム)の事務系・技術系の勤め人」(日本 9.4%, 韓国 1.7%)の割合は非常に低く、前回よりも減少している。

就労の継続希望(Q26)についてみると、両国とも高い割合(日本 87.5%, 韓国 90.6%)を示す。就労目的(Q27)として「収入がほしいから」(日本 42.7%, 韓国 63.4%)が最も高いことも注目される。今後の就労希望(Q29)及びその理由(Q30)においても同様の特徴が観察される。仕事をやめたい、あるいはしたくない理由(Q31)をみると、「健康上の理由」(日本 39.2%, 韓国 63.4%), 「自分に適した仕事がない」(日本 17.6%, 韓国 22.1%), 「仕事以外にしたい事がある」(日本 15.7%, 韓国 5.0%)の順である。このうち、「仕事以外にしたい事がある」という理由はその他の3カ国でも25.9%~62.0%を占めており、韓国は極めて低い。前記の就労を希望する理由と合わせると、韓国の高齢者は、健康問題など就労が困難な理由が特になく限り就労所得を得たいと考えていること

がわかる。

(3) 退職年齢 (Q28)



実際の退職年齢 (Q28) についてみると、韓国は 60 歳代前半 (37.7%)、50 歳代 (25.3%)、60 歳代後半 (20.8%) の順であり、日本もそれぞれ 41.8%、21.5%、15.8%と続く。性別による差をみると、女性は 60 歳代前半が最も多いが、50 歳代の割合も 30%前後と高く、男性に比べ退職時期が早い。男性では、日韓ともに 60 歳代前半が最も多い。日本の場合、60 歳代後半、70 歳代でも約 20%と高率を示すが、韓国の方は 50 歳代が相対的に多く 70 歳代以降は少ない。

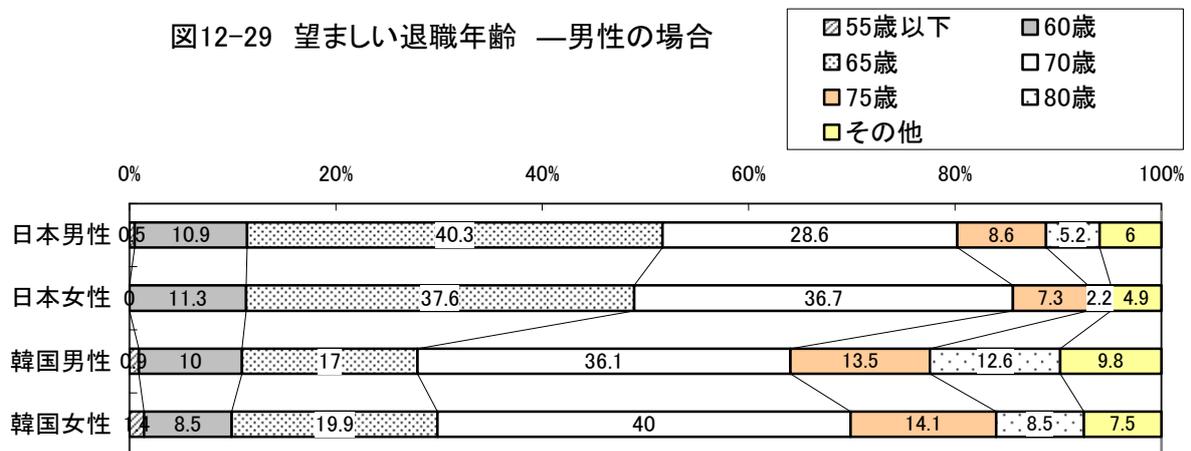
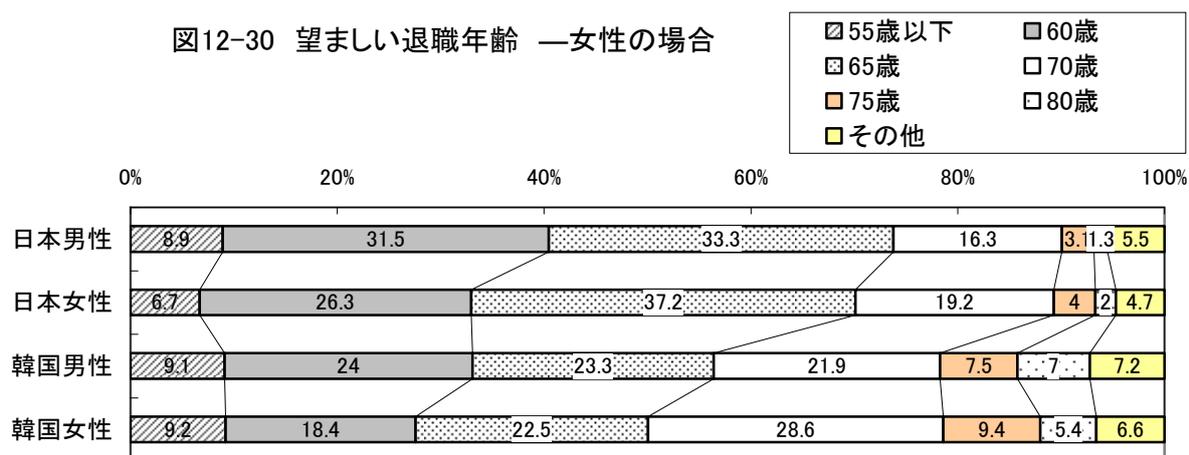


図12-30 望ましい退職年齢 —女性の場合



望ましい退職年齢 (Q32) についてみると、「65歳ぐらい」で日韓の差が大きい。日本では男女ともに「65歳ぐらい」(男性38.5%, 女性34.9%)が最大値であるが、韓国では「70歳ぐらい」(男性38.3%, 女性25.7%)の割合が高く、「65歳ぐらい」(男性18.7%, 女性22.8%)は相対的に低い。仕事内容による影響も伺えるが、日本では、退職年齢と公的年金の支給開始年齢が連動していることがわかる。公的年金制度が充実しておらず高齢期の収入源における就労所得の比重が高い韓国では、退職年齢の実際と理想の差が大きい。また「その他」の記述をみると、「健康である限り」、「年齢は人それぞれ」、「働けるうちは働きたい」など、日韓ともに退職年齢を特に意識していない内容が多い。

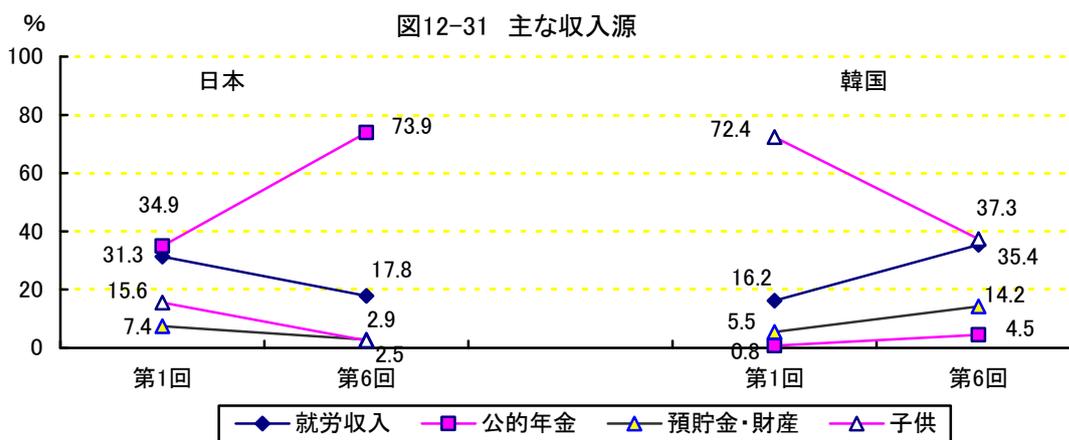
時系列で見ると、日本では大きな変化がみられないが、韓国の方は70歳以上の割合が大幅に増加している。韓国の第3回調査をみると、男性は「70歳ぐらい」(31.4%)、「65歳ぐらい」(24.9%)、「60歳ぐらい」(16.0%)、「75歳ぐらい」(9.8%)の順であり、女性は、「60歳ぐらい」(25.4%)、「65歳ぐらい」(22.1%)、「70歳ぐらい」(16.7%)、「75歳ぐらい」(女性4.5%)であった。今回の調査では男女とも「70歳ぐらい」(男性38.3%, 女性25.7%)が最も多く、「75歳ぐらい」(男性13.9%, 女性8.5%)も高率を示す。高齢期の生活の主な収入源として自身の就労収入を想定している高齢者の増加を意味する結果といえる。このような状況は韓国の「経済活動人口高齢層付加調査」(統計庁, 2006)にもよく現れている。2006年5月現在、55~79歳人口において定年退職で仕事をやめた人は全体の12%、彼らの平均退職年齢は54歳となっており、上記の韓国の高齢者の希望退職年齢とは開きがある。55~79歳層の就労希望者の割合は57.9%(482万人)で、希望就労形態は「全日制」が72.1%をも占める。さらに就労を希望する理由は「生活費を得るために」(34.3%)が最も多い。

## 5 経済生活

「2006高齢者統計」(統計庁, 65歳以上)によると、韓国の高齢者は、最も深刻な問題として「経済的問題」(44.6%)を挙げているが、「健康問題」(30.1%)や「孤独, 疎外感」(6.4%)を大きく上回っている。2002年調査では、それぞれ33.9%, 41.5%, 8.5%であり、「経済的問題」はさらに深刻になっている。

(1) 主な収入源と経済的な困窮度 (Q19a,19b,20,21)

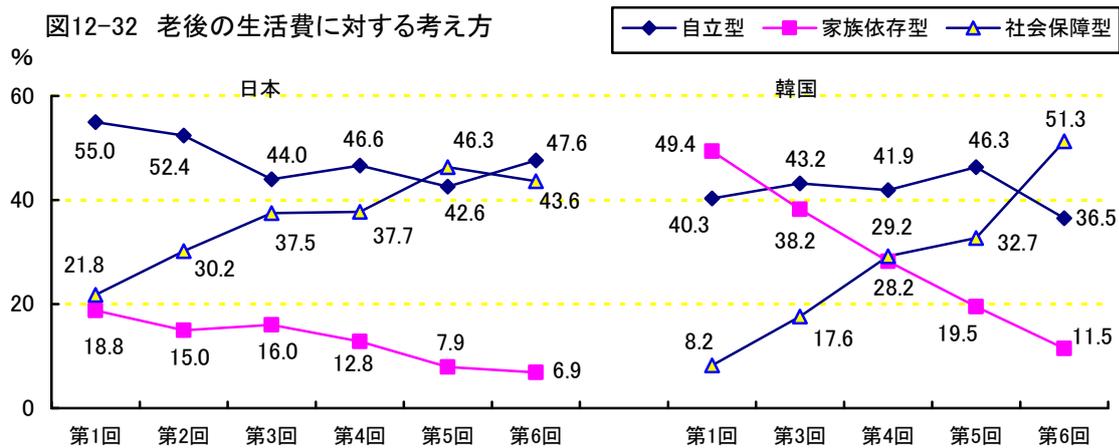
生活費の収入源 (Q19 a) についてみると、公的年金を主とする日本に対し、韓国は私的な収入源を主としているという構図は依然続いている。主な収入源 (Q19 b) をみると、韓国の場合、「子どもなどからの援助」(日本 2.5%, 韓国 37.3%) が最も多く、ほぼ同率で「仕事による収入」(日本 17.7%, 韓国 35.4%) が続く。韓国の「2006 高齢者統計」(統計庁) によると、2005 年現在、65 歳以上人口の公的年金需給者は 73 万 7 千人、16.8%に過ぎず、高齢期の収入源として公的年金を想定できる状況にはまだ程遠い。



経済的困窮度 (Q20) についてみると、韓国は 5 カ国の中で最も困窮度が高く、日本は 5 カ国の中で最も困窮度が低い。韓国の困窮度は、経済危機直後であった前回 (2000 年) よりは低くなっているが、「困っている」(日本 3.1%, 韓国 18.1%) と「少し困っている」(日本 11.4%, 韓国 31.5%) の比率合計値は 49.6%と、非常に高い。老後の生活のための備え及び充足度 (Q21, Q22) においても類似した状況がみられる。

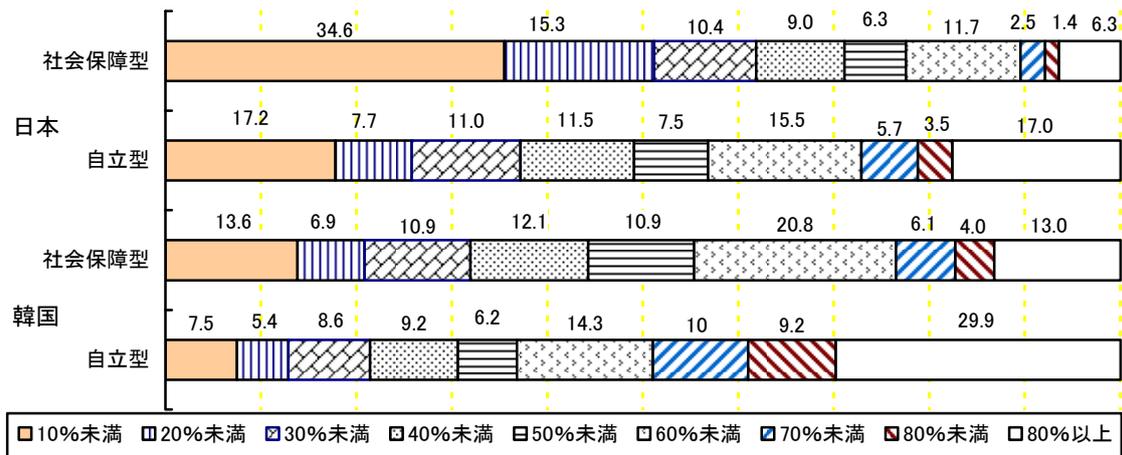
(2) 生活費のあり方と個人の負担水準 (Q59,60)

老後の生活費のあり方についての認識 (Q59) をみると、「家族や公的な援助には頼らない」(自立型) と「社会保障や公的な援助によってまかなわれるべき」(社会保障型) が大半を占めている。性別では大きな差がみられないが、年齢別では、「家族が面倒をみるべき」(家族依存型) の割合が加齢とともにやや高くなる。



時系列で見ると、日韓ともに「自立型」及び「家族依存型」が減少し、「社会保障型」は増加する傾向をみせているが、韓国の方で変動幅が大きい。特に、今回の調査において韓国は、「自立型」より「社会保障型」が15%ほど高く、「社会保障型」の割合が日本より高くなっている。

図12-33 老後の生活費についての認識別にみた個人負担の割合(%)



「老後の生活費のうち、自分でまかなうべきと思う割合」(Q60)についてみると、日本より韓国の高齢者が自己負担率を高く設定している。自己負担の割合を老後の生活費のまかない方(Q59)とクロスすると(図12-33)、韓国の「社会保障型」が想定している公的保障の水準は日本の「自立型」に近い水準であることがわかる。たとえば、自己負担30%未満までの累計値をみると、「社会保障型」では日本60.3%、韓国31.4%、「自立型」では日本35.9%、韓国21.5%となっている。

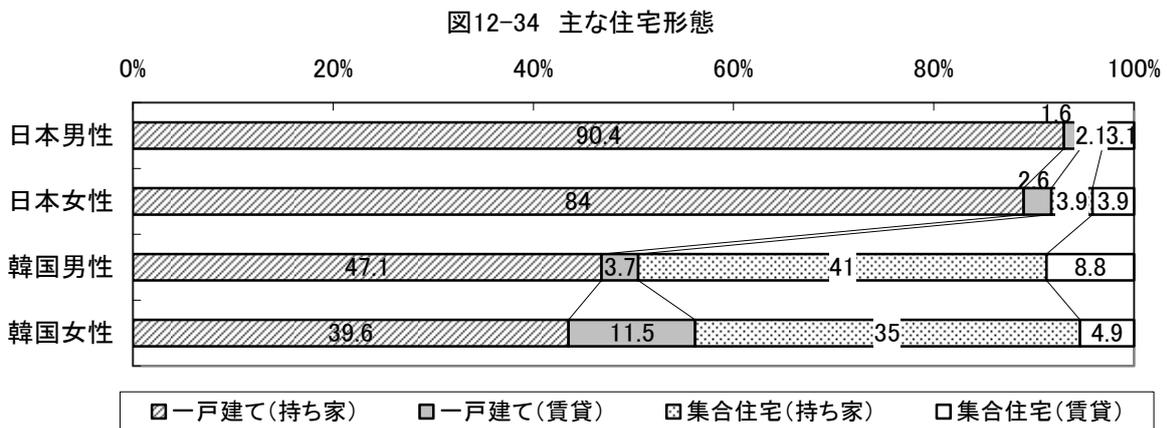
## 6 住宅・生活環境

住宅類型や所有形態、入居時期についてみると、日韓では顕著な差がみられるが、韓国の住宅事情を「2005人口住宅総調査」(統計庁)からみておこう。韓国では、朝鮮戦争(1950-53年)のため、1950年以前に建てられた住宅は非常に少ない上に、1970~80年代以降の急激な都市化、人口増加による住宅不足により集合住宅が急増するようになった。住宅の建築時期別構成比をみると、

1990～94年 22.7%，95～99年 23.0%，そして2000年以後が 22.1%の順で続いており，全住宅の 67.8%が 90年以後に建てられたものである。特に都市部の住宅は約 90%が 1980年以後に建てられたものである。世帯主が 60歳以上である場合に限定して住宅種類別構成比をみると，一戸建てが 63.6%，集合住宅が 25.6%の順であるが，時系列でみると集合住宅が増加する傾向にある。また世帯主が 60歳以上である世帯の住宅の所有形態別構成比をみると，持ち家が 75.8%，賃貸住宅が 21.4%である。

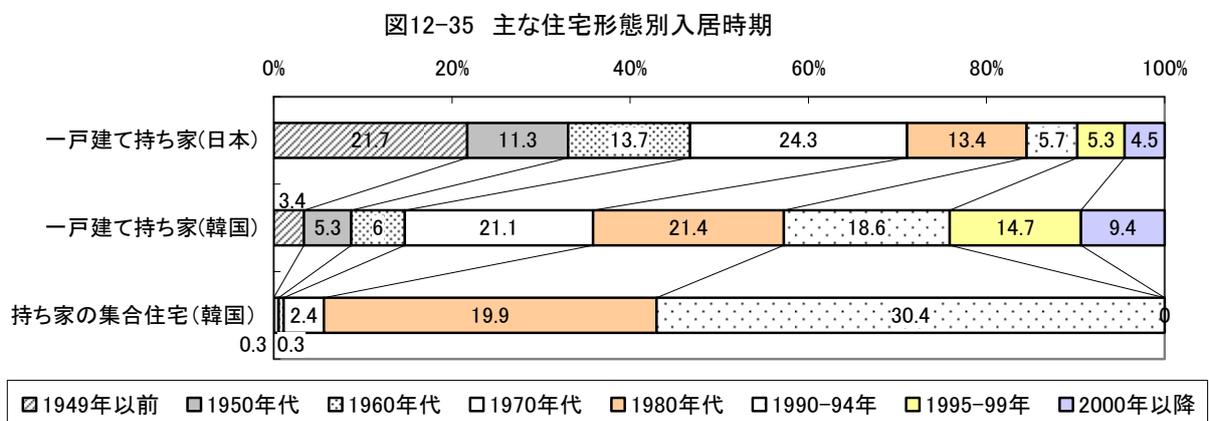
(1) 住宅の形態 (Q33)

現在住んでいる住宅形態及び所有形態 (Q33) についてみると，日本では「一戸建ての持ち家」の割合が 86.9%と，最も高い割合を占める。韓国の場合，「一戸建ての持ち家」の割合は 42.7%に留まり，賃貸住宅と合わせても 53%程度である。住宅の所有形態別では，持ち家の割合は日本 90.0%，韓国 80.2%で両国ともに高率である。しかし性別による差に注目すると，韓国で女性の賃貸住宅の比率が高くなっている。



(2) 入居時期 (Q34)

現在「住んでいる住宅への入居時期」をみると，1970年代まで (64.4%) が中心となる日本に対し，韓国は 80年代以降 (79.2%) の入居がほとんどであり，対照的である。



これを日本と韓国に多い住宅形態とクロスしてみると，日本の「一戸建て持ち家」では 1980年

代までに入居した割合は 84.4%に達する。韓国の場合、1980 年代までに入居した割合は、「一戸建て持ち家」が 55%、「持ち家の集合住宅」が 22.8%となっている。年齢階層別入居時期を見ると、高齢になるほど入居時期が古い日本に比べ、韓国では大きな差異は認められない。

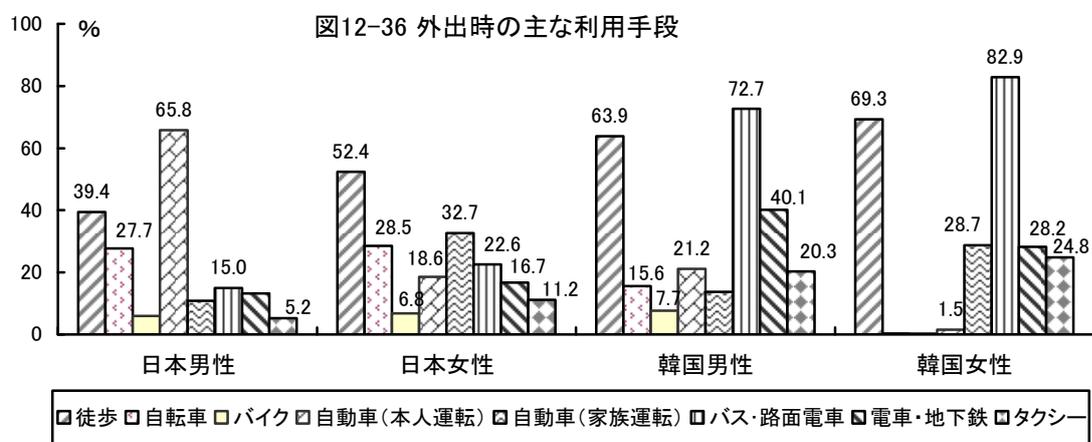
### (3) 身体機能が低下した場合の住宅 (Q39)

身体機能が低下した場合の住みやすさ (Q39) を時系列でみると「住みやすい」あるいは「まあ住みやすい」(日本 33.5%, 韓国 46.4%) と考える高齢者が増加している。また、身体機能が低下した場合の住宅の希望 (Q40) を時系列でみると、自宅の割合(日本 67%, 韓国 71.3%)が増加している。老人ホームへの入居希望(日本 12.5%, 韓国 6.9%)が漸増する一方で、「病院に入院」(日本 7.2%, 韓国 4.8%)は半減している。「子供の住宅へ引っ越したい」の割合は、日本は前回よりやや増加した 3.6%であるが、韓国は 6.2%に半減している。

### (4) 現在住んでいる地域の問題点と満足度 (Q37,38,41,42)

現在住んでいる地域の問題点 (Q37) と総合的な満足度 (Q38) についてみると、問題点の累計値は日本より韓国の方が若干高い(日本 87.6%, 韓国 99.4%)が、満足度では両国に大きな差はみられない。問題点の内容をみると、日常の買い物の不便さや犯罪、自然災害において日本が 6.5~13.5%の水準を示し、韓国より 2 倍ほど高くなっている。一方韓国は、公共施設の不足、公共交通機関が整備されていない、高齢者に使いにくいなど、いわゆる社会基盤の未整備への不満が高くなっている。

このような意見は外出時の利用手段 (Q41) 及び問題 (Q42) と密接な関係にある。外出時の利用手段をみると、日本の高齢者は、「徒歩」(46.4%)、「自動車(本人運転)」(40.3%)、「自転車」(28.1%)の順に多い。それに対し韓国は、「バス・路面電車」(78.6%)、「徒歩」(67.0%)、「電車・地下鉄」(33.2%)と、公共交通機関の比重が高くなっている。時系列でも、公共の交通機関の利用率が減少し「自分が運転する自動車」の割合が大幅に増加している日本と違って、韓国では一般的に公共の交通機関の利用率が増加している。



性別特徴をみると、男性で高い割合を占める「自動車(本人運転)」と「自動車(家族などが運転)」

で女性は非常に低い比率となっている。また韓国の女性は「自転車」(0.3%)及び「バイク」(0.3%), 「自動車(本人運転)」(1.5%)の割合が極めて低く、女性の自転車使用をめぐる日韓の文化的な違いがよく現れている。韓国の「社会安全に対する認識」(「2005 社会統計調査」統計庁)によると、65歳以上の高齢者が最も不安に思う点は「交通」(57.3%)となっている。

## 7 社会とのかかわり、生きがい

### (1) 近所との交流や友人 (Q43,Q44)

近所との付き合い方(Q44)や頻度(Q43)についてみると、日韓の差が著しい。まず付き合いの頻度をみると、日本では「ほとんどない」(27.4%),「ほとんど毎日」(24.6%),「週に2,3回」(20.4%),「週に1回」(18.8%)の順に並ぶが、韓国は「ほとんど毎日」が58.7%と圧倒的に多く、次に「ほとんどない」(15.7%)となっている。性別でみると、女性の方が男性より付き合いの頻度がわずかに高い。近所付き合いの内容をみると、韓国の場合、日常生活における助け合いや相談の割合が高く、日本では「ものをあげたりもらったりする」の割合が高い。「外でちょっと立ち話をする程度」の割合をみると日本は前回に比べ12.8%も増加し、これまでの調査の中で最も高い結果となっているが、韓国は前回に比べむしろ10.4%減少している。

友人の存在(Q45)についてみると、同性の友人が圧倒的に多い(日本50.4%,韓国55.1%)。「男性と女性の両方の友人がいる」高齢者の割合は日本が18.5%,韓国は8.2%と、日韓で10%ほど差がみられる。これを性別でみると、男性(日本24.1%,韓国12.4%)が女性(日本13.8%,韓国5.1%)より高い割合を示している。

### (2) 社会・学習活動への参加 (Q46,47,48,49)

社会活動や学習活動への参加状況(Q46, Q48), 参加しない理由(Q47, Q49)についても日韓では顕著な差がみられる。両国の主な社会活動をみると、日本は「近隣の公園や通りなどの清掃などの美化活動」(日本12.8%,韓国5.6%),「地域行事,まちづくり活動」(日本12.8%,韓国1.9%)であり、韓国は「宗教活動」(日本2.7%,韓国10.5%)となっている。「まったく参加したことがない」の割合は日本で53.4%,韓国で72.5%と、韓国の高齢者の参加率が非常に低い。学習活動に注目すると、日本では「民間団体が行うものへの参加」(日本10.6%,韓国4.0%)の割合が漸増している。韓国は公的機関で高齢者のために設けているものへの参加率がわずかに上昇している(日本5.5%,韓国7.8%)。韓国の高齢者の社会・学習活動に参加していない理由をみると、「経済的余裕がない」の割合が25%程度で日本の2%台とは著しい差がみられる。このような状況は情報機器を利用しない理由(Q51)でも同様に観察される。

### (3) 生きがいと生活の満足度 (Q52,53,54,55)

「日常生活における悩みやストレスの有無」(Q52)についてみると、両国とも「ある」の割合が減少している。「大いにある」(日本5.7%,韓国15.5%)と「少しはある」(日本39.0%,韓国45.9%)とを合わせると、韓国の高齢者の6割以上が悩みを持っており、日本の2倍に達する。悩みやストレス(Q53)の内容に注目すると、その他の項目では大きな差がみられないが、「生活費について」(日本12.8%,韓国33.4%)では差が大きい。経済的要因は「生きがいを感じる事」(Q54)に

も影響を及ぼしており、「収入があった時」（日本 7.7%，韓国 42.0%）の割合で日韓の差が最も大きい。この延長線上にあるものとして「現在の生活についての総合的な満足度」（Q55）をみると、「不満である」（日本 1.2%，韓国 5.8%）、「やや不満である」（日本 7.5%，韓国 24.9%）と、不満足な割合は韓国の方が 22% も高い。

## 8 今後の高齢社会への対応 （Q56, 58）

「今後の政府の政策全般における世代の比重」（Q56）についてみると、韓国の高齢者は「高齢者をもっと重視すべき」（日本 40.7%，韓国 73.4%）とする意見が圧倒的に多い。また「大切だと思う、高齢者に対する政策や支援」（Q57）についてみると、韓国は、合計解答率（日本 274%，韓国 371.5%）が日本より圧倒的に高い。「働く場の確保」（日本 24.5%，韓国 54.5%）や「医療サービス」（日本 52.7%，韓国 72.9%）などを中心に政策要望率が高い。前回と比べると、全般的に要望率が低下している日本に対し、韓国は大幅に増加している。「社会保障制度の水準や負担のあり方」（Q58）においても、日本は「維持すべき」（37.4%）の割合が最も高い。一方の韓国は「向上させるべき」（54.6%）の割合が過半数を超えており、高齢化社会の基盤づくりに向けて強い要望が現れているものと解釈できよう。